様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２２ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５３０９５８

研究課題名（和文）学校種や教科間の壁を越える授業研究のための教授学キーワードの再編と開発

研究課題名（英文）Restructuring and Development the "Keywords of Didactics" for Lesson Study Crossing over the Border of School Types and Subjects.

研究代表者
深澤　広明（FUKAZAWA, HIROAKI）

広島大学・教育学研究科（研究院）・教授

研究者番号：７０１６５２４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：学校現場で日常的に校内研修として取り組まれている授業研究が、小中連携といった学校種の壁を越えて取り組まれ、他教科の教員も参加できるような教科間の壁を越えて実施されている。そうした授業研究を支えるキーワードは、従来の「学び」論の視点を継承しつつも、教科指導と生徒指導の連関をふまえた「育ち」論のもとで再編される傾向にあることをアンケート調査等により明らかにし、再編した教授学キーワードをふまえた授業研究協議会シート等を開発した。

研究成果の概要（英文）：Lesson Study is daily practiced as in-school workshop. Lesson Study is practiced as a partnership between elementary schools and junior high schools, and involves many teachers of each subject. Such practice is supported with Keywords of Didactics. According to the survey, the Keywords of Didactics succeed to conventional "learning" theory, and tend to be restructured under "growing" theory based on the interaction between subject teaching and student guidance today. Therefore this study has developed a sheet for Lesson Study to improve it more useful.

研究分野：教育方法学

キーワード：教授学　授業研究　教科指導　生徒指導　教育方法学

１．研究開始当初の背景

日本の授業研究のあり方が世界から注目され、また発信もされている。その一端は、2009 年に刊行された日本教育方法学会編『日本の授業研究』が、上巻「授業研究の歴史と教師教育」及び下巻「授業研究の形態と方法」ともに、2011 年に３刷りを迎え、さらにこの著作の英文版が“Lesson Study in Japan”として刊行された。この英文版に序論（Introduction）を寄稿したキャサリン・ルイス（Lewis, Catherine）と秋田喜代美とが共編著で 2008 年に刊行された『授業の研究教師の学習－レッスンスタディへのいざない－』をはじめ、21 世紀に入って、「授業研究」を主題とする著書群が活発に出されてきている。さらに、こうした動きに連動して世界授業研究学会（The World Association of Lesson Studies International Conference）が 2011 年 11 月に東京で開催された。こうした今日の授業研究の盛況ぶりは、「反省的実践家」としての教師像や「構成主義」的な学習観、さらに「認知科学」や「学習科学」といった経験科学的な実証研究に支えられながら展開している。しかし、その一方で、こうした学術的発展は、「教材研究」や「発問」、「ゆさぶり」や「つまずき」といった教授学キーワードを産出してきた授業の構成原理を追究してきた伝統的な教授学研究のあり方を問い直すことになっている。こうした状況に加えて、伝統的な授業研究が、同一の学校種のなかで、あるいは一つの教科教育に即して実施されてきたのに対して、今日、保幼小連携や小中連携、高大連携といった学校種の壁を越えて共同で行う授業研究が行われる機会が増えてきた。とりわけ学力向上施策のもと、中学校地区を指定しての小中連携の授業研究は、その典型である。実際、申請者が近年、直面している授業研究のフィールドは、特定の学校における特定の教科の学習指導の改善を志向する授業研究ではなくて、たとえば小中連携のなかで一つの授業をめぐって論議する授業研究や一つの教科ないしは複数の授業をめぐって協議する授業研究を対象にすることが多い。そこでの論議を学術的に支える教授学の知見は、学校種の壁や教科の壁を越境する教授学として再編される必要がある。これまでの教授学の知見やキーワードを取捨選択し、その学術的再編にあたるとともに、教授学の今日的意義と克服すべき課題を見極める作業の必要性を感じたことが、研究開始当初の学術的背景である。

２．研究の目的

本研究の目的は、これまで学校のなかで、あるいは教科に即して実施されてきた授業研究とともに蓄積されてきた授業研究を支える伝統的な教授学の知見や教授学キーワードについて、小中連携をはじめとする異なる学校種が共同で行う授業研究や諸教科を横断して行われる授業研究といった今日的動向に対応できるように再編し、開発するものである。そのため、これまで使用されてきた教授学キーワードが授業研究の現場でどのように使用されているのかを吟味するとともに、今日的状況のなかで生み出されてきている新たな用語を確定することで、学校種や教科間の壁を越えて行われる授業研究を支える教授学キーワードを明らかにする。

３．研究の方法

研究の方法としては、基本的に二つのことを、つまり、理論的・文献研究的なアプローチと実践的・調査研究的なアプローチとを、同時並行的に、また相互に関係づけて行っていかなくてはならない。

まず、理論的・文献研究的なアプローチとしては、伝統的な授業研究を支えてきた教授学の学問的位置づけを、とりわけドイツ教授学の近年の学術的動向を踏まえて明らかにすることである。そのため、ドイツの教員養成の拠点でもあるオルデンブルグ大学（教育大学）の教授であり、『一般教授学入門』と『授業の理論』の共著書があり、すでに広島でも研究交流のあるキーパー（Kiper, Hanna）とミーシュケ（Mischke,Wolfgang）と連絡をとりあい、教育養成大学での教授学のあり方や陶冶論的な教授学と構成主義的な学習論との関連について等々、ドイツ教授学の動向に関する最新情報を入手し、教授学関連文献についての批判的検討を行うことである。さらに、PISA 後の教授学のあり方については、批判理論の立場から教授学のあり方について『理解することを教える』の著書等で発言しているフランクフルト大学の教授であるグルーシュカ（Gruschka, Andreas）の来日を機に、日本の授業研究のあり方について、学校訪問の上論議を行い、日本の授業研究の課題について国際的な視野から明らかにすることである。

こうした国際的な視野から教授学の検討をすると同時に、国内的な教授学の知見について、とりわけ戦後授業研究をリードしてきた教授学キーワードについて、歴史的な基本文献をもとに再評価を行い、今日の授業研究で語られる教育用語としてどのように継承されているのかを検討する。

次に、実践的・調査研究的なアプローチとしては、これまで長年かかわってきた授業研究のフィールドにおいて、あらためて授業研究の協議会でどのような教育用語や教授学キーワードが語られているのかについて、参与観察と教員へのインタビューによって明らかにすることである。さらに、学校種を超えた授業研究のフィールドとして小中連携型の授業研究をすすめる地域に継続的にかかわることで、小学校と中学校の教師の意識の違いについて、アンケート調査を行うことで明らかにする。

こうした二つの相対的に独自な調査研究をもとに、最終的には、これまでの授業研究

を支えてきた教授学キーワードを、学校種や教科間の壁を越えた授業研究を支える教授学キーワードに再編し、再編した教授学キーワードを反映させた授業研究を推進していくための授業過程の記録と分析のためのフィールドノートや授業研究協議会のためのワークシートを試案として開発する。

４．研究成果

校内研修としての授業研究において協議会等で論議される授業をとらえる視点は、授業の分析視点として授業研究の歴史のなかでたえず問われてきた。戦後の授業研究を担っていた全国授業研究協議会の編集した『授業研究入門』（明治図書、1965 年）において授業過程の「観察の方法」を執筆した吉本均は、授業をとらえる視点について次のように述べている。「ところで授業過程で、何を観察するかは、もとより観察するための目的によって異なってくるわけであるが、基本的には、授業のもつ構造に即して考えられなくてはならないと思われる。その授業のどこに注目するべきかは、単に観察者の主観的意図というよりは、授業というものの構造に規制されていることだからである。【中略】授業における教材習得の過程にとくに着目すれば、『認識過程』の問題となるだろうし、授業への子どもたちの参加のし方を分析しようとするとき、『集団過程』の問題となる。そして授業における教師のあり方を問題にするときには、『指導過程』にかんすることがらになってくるといえる。」（121～122 頁。）と述べている。

こうした知見にもとづく授業研究の歴史は半世紀に及んでいる。その間、授業研究で語られる授業の観察や分析の視点は、時代や社会の要請に対応しながら変化もしてきた。しかしまた授業の観察や分析の視点は、授業の構造を反映したものにならざるを得ない側面もある。ここで述べられている授業研究における集団過程のとらえ方は、まずは、授業以外の場である学級づくりという教科外の指導をも含んで広くとらえられている。その上で、授業に内在する認識過程と一対としての集団過程として、授業の目標実現のための学習活動の集団化や学習形態の問題が取り上げられることになる。授業研究における集団過程の問題は、授業の内側と外側の二つの面から、それぞれ授業の認識過程にどのような影響を及ぼしているのか、その二重の相互連関から検討していくことが必要であることが明らかになった。

こうした伝統的な教授学の知見は、近年の授業研究においても、教科指導とともに生徒指導の視点や関連について協議会で言及されることが多いことに継承され、今日的状況のなかで反映していると考えられる。とくに中学校での授業研究で授業規律や学習規律、さらには「生徒指導の三機能」といったことが話題になるだけでなく、学力向上を研究主題とする小中連携型で取り組む授業研究においても、小中での生徒指導上の「連携」にとどまらず、小中で「一貫」した授業規律への取り組みや「統一」的な学級経営のあり方が追求される現状にも遭遇する。まさに、学級づくりや学級活動といった授業外での取り組みが、授業にどのように作用しているのか、あるいは授業のなかでの集団的な学習活動や学習形態が、教科指導上の目標実現にどのように応えようとしているのか、「教科指導と生徒指導の相互連関」のあり方が問われている現状が各地の授業研究をフィールドワークするなかで明らかになった。

そうした動向の実相により深く迫るために、広島県内で「小中連携型の学力向上」に取り組む三つの地区で行ったアンケート調査を行い、「教科指導と生徒指導の相互連関」にかかわって、どのような視点で授業研究が取り組まれているのか、授業研究の実相の一端を小中の差違や地域の特徴をふまえて検討した。その結果について、総合的に考察するならば、これからの授業研究において、教科指導と生徒指導の相互連関のあり方を見直し、どのように構成していくのかについて、次の５点を提言としてまとめた。

（１）「生徒指導の三機能」は、教育あるいは教科指導全体で達成させるべき「指標」であって、その達成や実現について、それぞれの機能を独立させ、授業の場面や領域における実践の「指針」として扱わない。

（２）生徒指導を教科指導の内側に閉じ込めて議論しない。教科以外の特別活動や道徳教育といった領域での生徒指導の取り組みと連動させて授業研究でも論議するようにする。学級指導や学級活動での「生徒指導の三機能」の達成が、教科指導にどのような影響を及ぼしているかについて授業研究の協議会で論議されるようにすべきであるし、また、現実の授業研究の協議会では行われている。

（３）「小中連携型」で取り組まれる際の生徒指導部会の活動を、協会以外の特別活動や道徳といった領域に閉じ込めない。教科の授業研究においても、その授業にかかわりながら、教科以外の場での生徒の様子や、取り組みの成果を積極的に提言するようにする。文字通り「積極的生徒指導」の役割を果たすようにする。

（４）「学力向上」に取り組む授業研究であっても、協議会の論議を「学力」に閉じ込めることなく、子どもの人間的成長といった生徒指導が求める本来の教育の目標との関連でとらえ直す論議を行うようにする。

（５）授業研究における「教科指導と生徒指導の相互連関」を問い直す教育学的な営みは、「教育なき教授はなく、教授なき教育もみとめない」（ヘルバルト）という授業における人間形成、あるいは人間形成にとっての授業の意義を問い直し、再構成していく古くて新しいテーマに今後取り組んでいくことが重要である。

こうした５点を踏まえつつ、本研究の最終的なまとめとして、授業研究のフィールドワークで頻繁に登場する用語、あるいはドイツ教授学の研究者らとの論議をふまえての視点を反映させた、学校種や教科間の違いを超えて共通の枠組みで、授業を観察し記録するためのノート、さらに授業について分析し協議するためのシートを、仮説的に作成した。

フィールドノートとしての授業記録の枠組みは、伝統的な教授場面と学習場面の展開過程に即して記録していくスタイルであるが、両者の媒介項として、教授メディアの活用と学習形態の転換を中間には位置するものとなった。また、記録のさいに教師の教授行為は、説明、発問、指示、評価のカテゴリーにおいて、生徒の学習行為は、話す、聞く、読む、書くといった今日の「言語活動」を反映したものとなった。

授業後の協議会のためのワークシートについては、授業過程の分節化としての伝統的な導入、展開、終末を継承しつつも、教師の教授行為の分析においては、＜めあて＞の提示、＜ヤマ場＞の構成、＜まとめ＞の演出を配置し、それぞれの文節において、児童生徒の学びの分析については、教材研究とメディア、発問とゆさぶり、振り返りと評価活動を視点のから記入するようにした。さらに、生徒指導の３機能の観点からの分析欄として児童生徒の育ちの分析を設定し、授業への参加（active）としての自己決定、学びの交流（collaborative）としての共感的理解、教室文化の創造（creative）としての自己存在感を配置し、教科指導と生徒指導の相互関連を志向するモデルを試行的に開発した。

今後はこうしたツールを使用した授業研究を積み重ねることで修正を加え、次世代の教育にふさわしい授業研究の教授学キーワードを生み出していくことが課題である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

１．深澤広明・佐藤雄一郎、授業研究における教科指導と生徒指導の相互連関と構成方法、教育学研究紀要、第 60 巻、査読無し、2015、pp.77-88。
２．深澤広明、授業研究における教授学キーワードの問題史、学校教育、No.1157、査読無し、2014、pp.12-17。
３．深澤広明、「三つの拍手」―「よさと可能性」への肯定的評価（指導的評価活動）、授業力＆学級統率力、No.042、査読無し、2013、pp.108-111。
４．深澤広明、生活綴方的教育方法―「教科の論理」を「生活の論理」に「たぐりよせる」、授業力＆学級統率力、No.041、査読無し、2013、pp.108-111。
５．深澤広明、「ゆさぶり」―「無限の可能性」と「ヤマ場の構成」に向けて、授業力＆学級統率力、No.040、査読無し、2013、pp.108-111。
６．深澤広明、「百マス計算」―習熟と意欲の間、授業力＆学級統率力、No.039、査読無し、2013、pp.108-111。
７．深澤広明、班―島型に座る「学習形態」なのか、子どもの「生活の居場所」なのか、授業力＆学級統率力、No.038、査読無し、2013、pp.108-111。
８．深澤広明、発言形式（話型）―言語技術なのか授業規律なのか、授業力＆学級統率力、No.037、査読無し、2013、pp.108-111。

〔学会発表〕（計２件）

１．深澤広明・佐藤雄一郎、授業研究における教科指導と生徒指導の相互連関と構成方法、中国四国教育学会第 66 回大会、2014 年 11 月 15 日、広島大学。
２．深澤広明、授業研究における教授学キーワードの再編と開発、中国四国教育学会第 65 回大会、2013 年 11 月 2 日、高知工科大学。

〔図書〕（計２件）

１．深澤広明、教育方法学研究の対象と方法、日本教育方法学会編、教育方法学研究ハンドブック、学文社、2014 年、pp.20-27。
２．深澤広明、教えることの「技術」と「思想」、深澤広明編著、教育方法技術論、協同出版、2014 年、pp. 9-20。

６．研究組織
(1)研究代表者

深澤　広明（FUKAZAWA HIROAKI）
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：70165249